

## 隅田川流域の料理茶屋における文化活動について

小 山 周 子 \*

はじめに

1. 隅田川流域の料理茶屋
2. 料理茶屋における書画会
3. 天保七年八月十四日の馬琴の書画会
4. 書画会の世話人・扇面亭平四郎

おわりに

キーワード 書画会 柳橋 料亭 万八楼 曲亭馬琴 扇面亭平四郎 沖一峨

### はじめに

本稿では、江戸時代後期、隅田川沿いの料理茶屋で開催されていた「書画会」とその主催者、関係者の動向を取り上げる。

「書画会」とは、主催者が料理茶屋などを借り切り、期日を定め、関係の人々に出席の呼びかけをして開催した書画の会合で、天保期前後に大流行した。会の参加者は決められた席料を支払い入場し、著名な儒学者、書家、絵師らによる書画に親しみ、料理茶屋で出される飲食を楽しんだ。即席で作られた席書・席画を買い求める際には、別途支払いが必要な仕組みであった<sup>1)</sup>。

このような江戸の書画会の模様をよく描き出しているのが、歌川広重（2代）による三枚続きの錦絵「風流書画会之図」【図1】である。隅田川の眺望がすばらしい料理茶屋の二階座敷で席書・席画が行われ、予め準備された書画は鑑賞用に長押に掛けられている。集まった人々には、酒や肴、茶などが出され、多くの芸者が会の世話を行う様子も見られる。本図は描かれた文人らから、時期は文久頃と考えられる<sup>2)</sup>。作品名に「風流」とあることから、架空の書画会を描いた可能性も考えられる。

書画会の始まりについては、『武江年表』の「寛政年間記事」に、「酒楼に於いて書画会を催す事此の頃始まる」<sup>3)</sup>とあり、寛政年間に書画会が開始されたことが推定されている。また、大田南畝は、寛政4年（1792）1月17日に開催された谷文晁と一門、鐙木梅溪らの七人で柳橋万屋（万八楼）にて開催された書画の会が「近世所謂書画会從此始也」<sup>4)</sup>と文化7年（1810）の『識語集』で振り返っている。さらに、谷文晁の書画会から4カ月後の寛政4年5月には、同じ万八楼にて山東京伝の書画会が開催さ

\* 東京都江戸東京博物館学芸員



図1 風流書画会之図 文久（1861～4）頃 館蔵93201641～3

れたことを曲亭馬琴が記録する<sup>5)</sup>。京伝はこの書画会で170、180人の出席者を集め、収益30両を得て、それをもとに煙草入と煙管を扱う店舗を銀座に開くことができた。このようにおよそ寛政年間に始まり普及したとされる書画会は、その当初より料理茶屋という場が利用され、京伝の例にも見られるように、書画をめぐる経済的活動の側面を持つものでもあった。

その後、隅田川沿いの料理茶屋を中心に、書画会は数多く開催されるようになり、戯作者の畑銀鶏が『南柯乃夢』において「そこにも書画会、爰にも書画会、書画会で目をつくほどの流行」<sup>6)</sup>と書き記すほどの盛況振りであった。

一方、その実態について、『嬉遊笑覧』では、「近來書画会所々の料理茶屋に於て催す事、四時絶る事なく盛りに行はる、其卑俗なる事、御法度のはな会とて小歌上るりをどり子供の名弘めに異ならず、(中略)」<sup>7)</sup>と、日々いずれかの料理茶屋で絶え間なく開かれるようになった書画会の実態とは、名披露を目的とする会合と同様「卑属」なものであると非難した。

以上、同時代の文献で述べられた概要をまとめたが、本稿では、江戸時代後期に流行した書画会を中心に隅田川流域の料理茶屋における文化活動に関して、以下の課題を設定し、本論を展開していくものとする。

#### (1) 隅田川沿いの料理茶屋や書画会の基礎データの収集を行う。

前掲の同時代の文献にも、隅田川沿いの有名料理茶屋で書画会が多く開催されるという記載は散見される。しかし従来の研究において、料理茶屋自体の、あるいはそこで行われたという書画会の情報がまとめられているとは言えない。そこで、既存の研究成果なども参考にしつつ、基本データを押さえておきたい。

(2) 書画会の開催にともなう、主催者や関係者の動向を探る。

書画会的主催者や関係者の動向を資料から押さえ、江戸後期に隅田川の料理茶屋で数多く開催されるようになった背景について検討を行う。具体的には、天保7年（1836）8月の曲亭馬琴の柳橋料亭の万八楼で行われた大規模な書画会について、馬琴自身が発信した書簡類から扱い、その活動実態を見てゆくこととする。

(3) 文人墨客の交流・遊興の「場」として隅田川流域を捉えなおす。

書画会は、江戸時代後期に興隆し、隅田川流域の料理茶屋は文人墨客が集う場となった。明治期以降、その集まりは徐々に開かれなくなり、その活動はやがて忘れ去られていった。従来、隅田川流域における文化活動といえば、花火や盛り場、あるいは四季折々の行楽などが話題の中心であった。本稿では分野や身分を越えて繰り広げられた文化人らの旺盛な交流関係を取り上げ、この地域の地域研究、また江戸文化研究の一助となることを目指すこととする。

## 1. 隅田川流域の料理茶屋

### (1) 各資料における隅田川流域の料理茶屋の掲載

料理茶屋について、『守貞謾稿』では、「割烹店を云、料理と云は万事を計り調ふを云也、今俗は唯食類を製するの名とす」<sup>8)</sup> という。料理茶屋とは割烹店、料理を提供する店を指し、料理とは食事を作ることを指す。一方、本稿で扱う料理茶屋とは、現代で述べるところの高級・有名料亭を指し、座敷を持ち、種々の会合などにも利用され、酒や食事も提供されるような料理店を指す。このような狭義の意での料理茶屋は、18世紀半ばに江戸の街中に多く広がっていった。安永6年（1777）に刊行された三都の名物評判記『富貴地座位』<sup>9)</sup>には、江戸の料理茶屋として、洲崎の升屋、浮世小路の百川、向島三囲の葛西太郎、中洲の四季庵などの名前が挙げられている。なお、料理茶屋は料理屋とも呼ばれ、同義ではあるものの、本稿では『江戸学事典』や『江戸東京学事典』などでも立項されていることに倣い、料理茶屋の用語を使用することとする。

まず、本稿の話題となる隅田川流域の料理茶屋について、地域や店名を資料から追っていくと、向島や今戸、柳橋、東両国の料理茶屋の名が、江戸を代表する料理茶屋として掲載がある。【表1】は、『守貞謾稿』、番付「即席会席御料理屋」、『江戸買物独案内』、歌川広重の錦絵「江戸高名会亭尽」シリーズより、それぞれの資料に掲載の料理茶屋の総数と、向島や今戸、両国地域などの隅田川流域の料理茶屋を抽出したものである。ただし、本稿にあまり関連性の少ない浅草寺門前や山谷、吉原、深川の料理茶屋について敢えて除いている。そのため例えば、江戸随一の店と知られる「八百善」などは流域ではないと判断できないがここでは含まれていない。

【表1】 1の『守貞謾稿』では「料理茶屋」の項で、江戸の料理茶屋を23軒挙げ、そのうちの12軒が隅田川流域に該当する。

【表1】隅田川流域の料理茶屋

	資料名 等	総料理茶屋 (軒)	隅田川流域の料理茶屋	
			数(軒)	【地域】店名
1	『守貞謄稿』 (江戸後期)	23	12	【向島】 大七、武蔵屋
				【真崎稻荷前】 甲子屋
				【橋場】 川口、柳屋
				【今戸】 大七
				【小梅】 小倉庵
				【柳橋】 川長、万八、梅川、亀清
				【東両国】 中村屋
2	番付「即席会席御料理 屋番付」 (江戸後期)	行司21 (全183)	行司7 (全27)	【向島】 大七
				【小梅】 小倉庵
				【柳橋】 万八、河内屋、亀清、柳屋
				【東両国】 中村屋
3	『江戸買物独案内』 (文政7年(1824))	63	18	【向島】 植木屋、武蔵屋、平岩
				【真崎稻荷前】 甲子屋
				【今戸】 金波楼、二文字屋、玉庄
				【柳橋】 鶴岡、万八、河内屋、桜川、亀清、 川口、草加屋(薬研堀)
				【東両国】 中村屋、青柳、三河屋
4	歌川広重 「江戸高名会亭尽」 (天保8～11年) (1837～1840)	30	13	【向島】 大七、植木屋、武蔵屋、平岩、出羽屋
				【橋場】 柳屋
				【小梅】 小倉庵
				【今戸】 玉庄
				【柳橋】 万八、河内屋、梅川、大のし
				【東両国】 青柳

柳橋北ノ川長、宅広ズト雖ドモ美食ナリ 以下ハ同品也。向島大七、今戸大七、橋場ノ川口、真崎ノ甲子屋、小梅小倉庵。柳橋ノ梅川、万八、亀清、中村屋等ハ家広ク、食類精製ニ非ズ。橋場ノ柳屋、向島武蔵屋近年亡タリ。<sup>10)</sup>

これによれば、柳橋北の川長は大きな料理茶屋ではないが食事は美味である。他に、向島大七、今戸大七、橋場の川口、真崎の甲子屋、小梅の小倉庵などがある。柳橋の梅川、万八、亀清、中村屋などは広い座敷を持つが、料理は劣る。橋場の柳屋、向島の武蔵屋は近年滅びた、とある。この



最後の柳屋、武蔵屋が減びたという記述によれば、『守貞謾稿』は幕末に近い時期の記述と推定される。

【表1】2の当館所蔵の番付の一つ「即席会席御料理番付」【図2】は江戸時代後期の刊行と推定されている。この番付では、江戸の183軒の料理茶屋名が挙げられ、このうち隅田川流域は27軒である。番付中央の行司欄の店は、江戸全体で21軒、このうち7軒が隅田川流域にあたる。行司欄に載ることは、別格の店舗であることを示し、この欄に掲載された、向島大七、小梅小倉庵、柳橋万八・河内屋・亀清・柳屋、東両国中村屋の各店は、江戸有数の料理茶屋であったと言えるであろう。【表1】3の『江戸買物独案内』（文政7年（1824））【図3】は、江戸におけるさまざまな買い物と飲食の店舗およそ2600店について紹介を行う案内本であるが、63軒の料理茶屋が掲載され、このうち隅田川流域は18軒である。この『江戸買物独案内』掲載の63軒を地図上に示したものが、「『江戸買物独案内』の料理茶屋分布」【図4】である。本図から、当時、隅田川の周辺など江戸東側地域で多くの営業が行われていたという傾向がうかがえる。

また、このような江戸時代後期における料理茶屋の繁盛を背景に刊行されたのが、【表1】4の歌川広重の30枚揃いの「江戸高名会亭尽」シリーズである。このシリーズは、天保8年（1837）から同11年（1840）頃の制作と推定されている。各図に江戸の料理茶屋の内観や外観を描き、そのもてなしの様子や店の雰囲気を描く。30図のうち13図が、隅田川流域にあたり、絵師である広重自身の関心が寄せられたものか、料理茶屋での書画会の模様を描いた図も数図含まれる。

以上の資料から、江戸有数の料理茶屋の少なくとも三分の一ほどの店舗が隅田川流域にあったことが推定される。なかには柳橋の万八などいずれの資料にも掲載の店舗もあり、この地域に有名料理茶屋が集まっていたことがうかがえる。

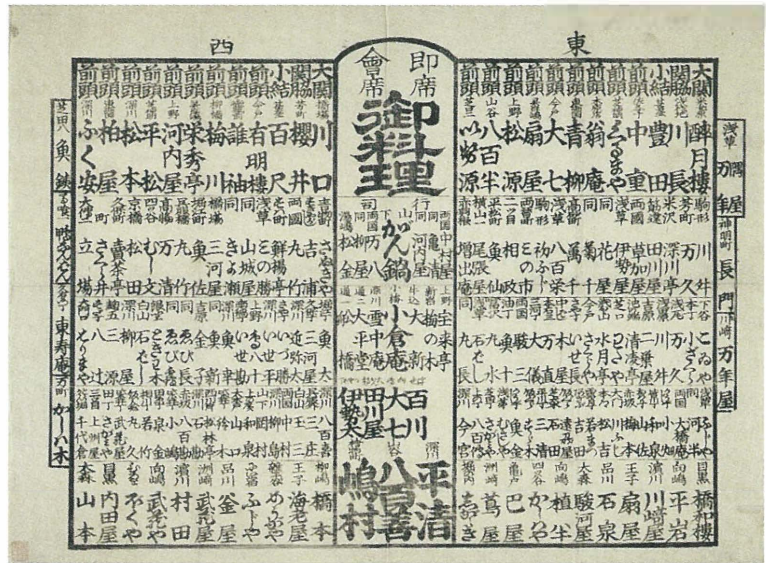


図2 即席会席御料理番付 江戸時代後期 館蔵93200449

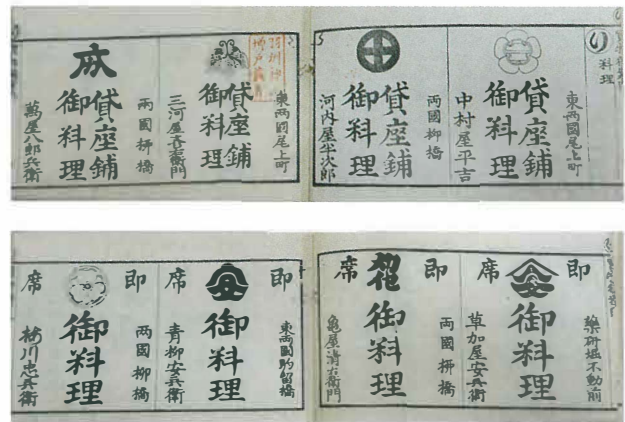


図3 『江戸買物独案内 飲食之部』  
文政7年（1824） 館蔵86200702



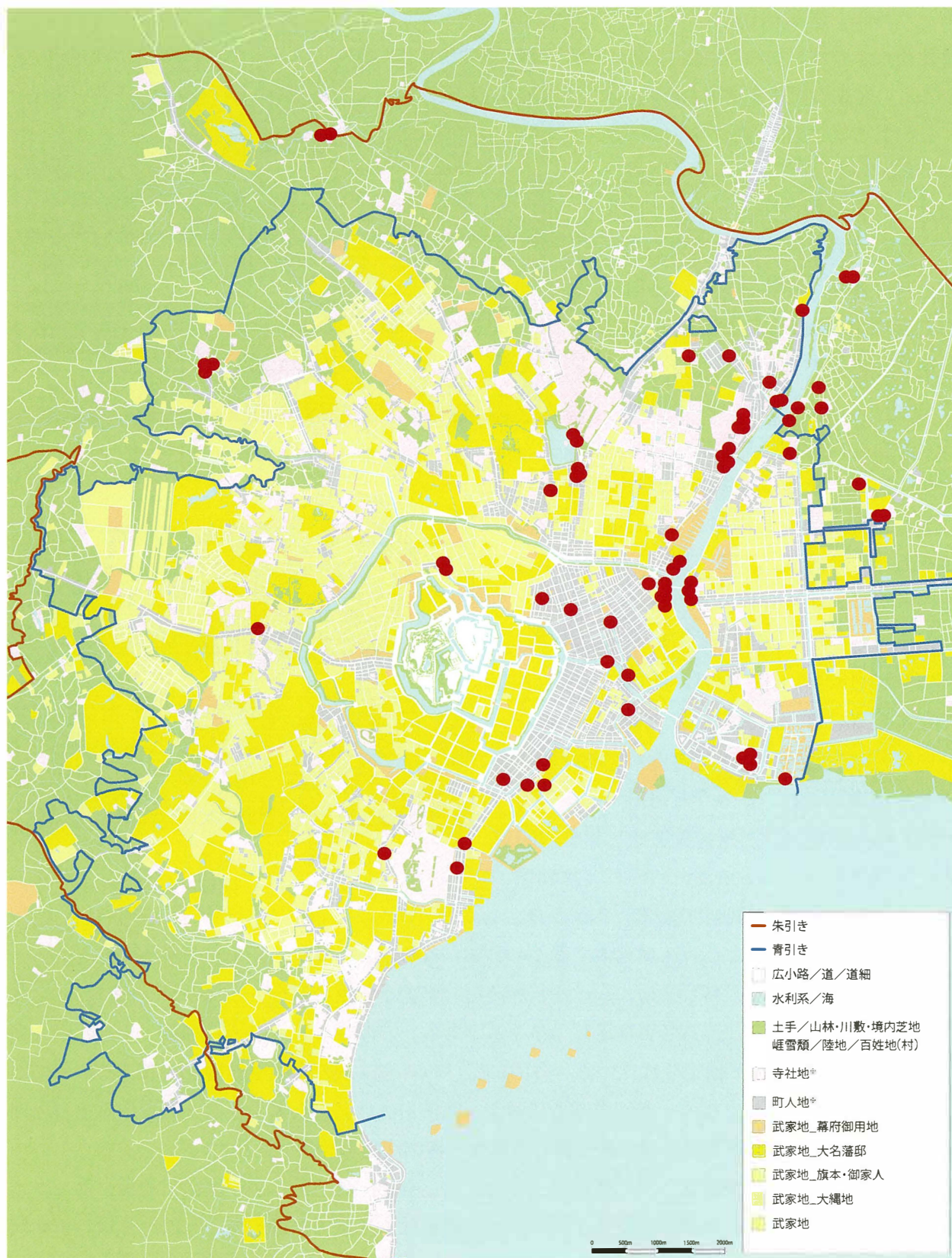


図4 『江戸買物独案内』の料理茶屋分布



## （2）天保改革時の隅田川流域の料理茶屋に関する調査報告

天保14年（1843）、天保改革の奢侈禁止令に伴い、江戸の各料理茶屋について建物の設えや提供されるサービスの実態に関する念入りな現地調査が行われた。これは、同年4月に出された在町家作の取締令に関するもので、町触に違反する料理茶屋等の家作、業種、所有者、所在地を詳細に調べ上げた屋敷改と町奉行所の報告がなされた<sup>11)</sup>。隅田川流域の店舗においても、以下のとおり調査が実施され、ここから各料理茶屋がどのような設備であったのか、また提供された飲食の内容についても理解できる<sup>12)</sup>。

### ・小倉庵 本所南元瓦町 小倉庵長右衛門

右は、表入口土蔵脇より飛石たたきにて、内三間に五六間程之二階家造仕、其外は平家造り数奇屋風、通路露次形飛石或は小砂利敷置、這入口又は窓え蓆簾懸け置、品々手数懸り、花麗手広にて造り方補理、客分ケ仕、表向は萩の露と申汁粉商ひ、好み候者御座候得は、懷席仕立酒喰差出候、湯等も為遣候、小座敷共都合建家拾棟程、手広住居御座候、後之方、小梅村之汐入川見晴らし宜場所に御座候、

小倉庵は、切絵図「隅田川向島絵図」（部分）【図5】にも掲載があり、源森川に面していた。表入口から入ると、土蔵脇からたたきに飛石が敷かれており、3間×5、6間の二階建のほか平屋造りの数奇屋風の建物があった。通路は露地風で、飛石か小砂利が敷かれており、各入口や窓には簾がかかるなど手数が多かったもので、華やかで広く造りも整えられ、客を分けて対応していた。表向きは「萩の露」という汁粉の商いであったが、客の好みに応じて、会席料理を仕立て、酒や湯茶も饗した。小座敷の建物は合わせて10棟ほどで、すべて広々とし、後方は小梅村の汐入川の見晴らしが良い場所である、とある。

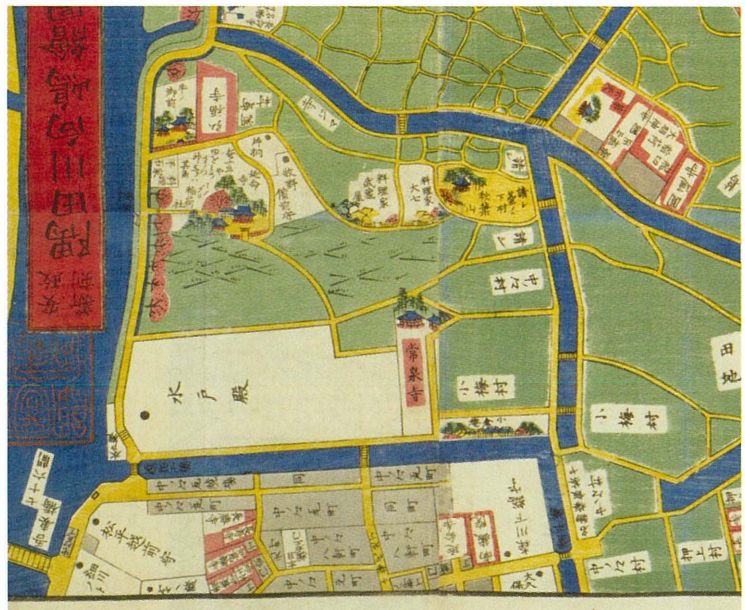


図5 隅田川向島絵図（部分） 安政3年（1856）  
国立国会図書館蔵

### ・川口 橋場町 川口屋忠七

右は、表之方町家之中に入口御座候て、夫より這入、川附之方折曲り、木戸門右内に四間に八間之二階土蔵壱棟、五間に拾五間程之建家、右之内、大川見晴らし候方二階家に仕、三間に四間

余之平家壺棟、庭之無、大川より上り口有之、舟にて参り候者多御座候、懷席仕立料理好み候得は、器物寄麗之品差出候、当時流行仕候由御座候

川口屋は、橋場町の隅田川沿いに建てられていた。表口玄関は町家の中にあったが、隅田川からの出入口もあった。町家側の入口から入ると、4間×8間の二階建ての土蔵が1棟、5間×15間の母屋があり、大川（隅田川）を見晴らせる二階建てであった。3間×4間余りの平屋も一棟ある。庭はない。隅田川から上がり口があり、舟でやって来る客も多い。会席仕立の料理を食器も豪華なもので提供する、流行の料理茶屋である。

・同所 柳屋久兵衛

右は、表之方板塀・門目立不申候、川口屋より家作手広、庭石・木石・灯籠等御座候、是も大川より舟にて参り候もの多く、上り口石段御座候、酒喰其外川口屋同様御座候、

川口屋と同じく橋場の料理茶屋の柳屋は、表側は板塀で、門は目立たないものであった。川口屋より広く、庭には庭石や木石、灯籠などもある。この料理茶屋も隅田川から舟で来る客が多く、上り口には石段がある。酒や料理などのサービスは川口屋と同様であった。

・金波楼 今戸橋川附之方 玉屋庄八

右は、橋際より川端木戸門、建家手広御座候、川口屋・柳屋同様之料理仕候処、当時一品に付三分より八分位迄之品差出、高直之品差出不申候旨、断書張出置候、

金波楼こと玉庄は、今戸橋の橋際の川端の木戸門から入る。建物は広く、川口屋や柳屋と同様の料理を提供するが、当時、一品につき銀三分から八分ほどの品を出し、高価な品は提供しない旨の断り書が張り出されていた。

・本所隅田村 木母寺境内 東屋源蔵 武蔵屋長蔵

右、東屋之方入口木戸門、内三間に長拾間程建家壺棟・三間に五間之建家壺棟、寄麗補理、酒喰前之者同様御座候、庭少々御座候、裏之方汐入川見晴らし御座候、

木母寺境内の料理茶屋の東屋（吾妻屋）と武蔵屋は、東屋の方の入口は木戸門で、内部はそれぞれ3間×10間の建家が一棟、3間×5間の建家が一棟あり、綺麗に設えている。酒や料理は他店と同様で、庭が少々あり、裏の方の汐入川の見晴らしがよい。

・植半 同所同寺境内 植木屋半右衛門

右は、木母寺境内 御通抜之節は 御猶予に相成候趣御座候、家作手広には御座候得共、花麗之造方には無御座候、料理は仕候得共、当時は客無之趣御座候、

同じく木母寺境内の植半は、通り抜けの際に時間がかかる趣にしつらえている。家、庭ともに手広くはあるが、豪奢ではない。料理は提供しているが、調査時には客がない様子であった。

この天保改革に伴う調査報告は、残念ながら、隅田川流域の料理茶屋については上記6店舗のみで、柳橋や両国の料理茶屋は含まれていないため、偏りがある。しかし同調査報告は、天保後期の料理茶屋の趣向を凝らした設えやもてなしの様子がうかがえ、次の「江戸高名会亭尽」シリーズと重なる店も多く、大いに参考となる資料である。

### （3）描かれた隅田川流域の料理茶屋～歌川広重「江戸高名会亭尽」シリーズより

次に、天保8年（1837）から11年（1840）頃の歌川広重画「江戸高名会亭尽」シリーズの内、隅田川沿いの各店を描いた13図について確認する。前項の天保改革時の調査報告と重複の店も多く、各料理茶屋のもてなしの様子がうかがえる。【表2】は、同シリーズ中の隅田川流域の店舗の図であり、図中の狂句とその作者を載せたものである。同シリーズは、版元藤岡屋彦太郎からの刊行で、料理茶屋側からの入銀の可能性も指摘されている<sup>13)</sup>。

「木母寺雪見 植半」【図6】は、木母寺の北西部にあたる場所にあった。木母寺からと、本図で描かれるように隅田川から舟で乗りつけるルート両方があった植半を描く。広重は本図と同じ構図の作品を、嘉永3年（1850）の『絵本江戸土産』内「木母寺料理屋御前栽畑内川」【図7】や「名所江戸百景 木母寺内川御前栽畑」【図8】でも描いた。本図では、雪見を楽しむ冬の情景とし、屋根舟に乗って訪れた風流な客と芸者を描き出す。植半は、木母寺境内で植木屋が掛茶屋を開いたのが始まりで、明治末頃まで経営が続けられた。



図6 江戸高名会亭尽 木母寺雪見 植半  
天保8～11年（1837～40） 館蔵09200008

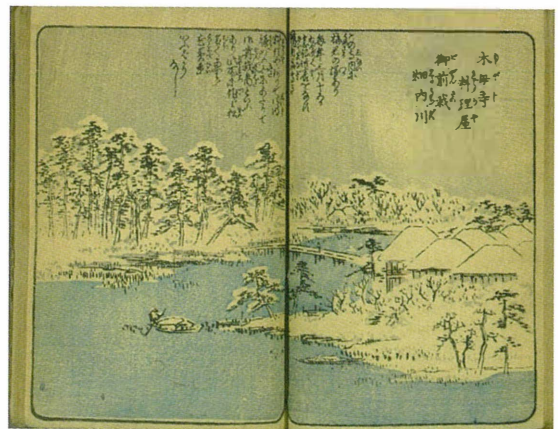


図7 『絵本江戸土産』第1編「木母寺料理屋御前栽畑内川」 嘉永3年（1850）  
館蔵86213044



【表2】「江戸高名会亭尽」隅田川流域の作品及び狂句・作者

	作品名	狂句・作者
1	木母寺雪見 植半	植木屋て手ぎはを作る松の魚
2	隅田川橋場渡之図 柳屋	舟つきの柳屋四季のわかめまで・惟草庵
3	牛嶋 武蔵屋	鐘梅のかほる権三か垣の外・株木
4	向島 大七	川をへたて甲子と大黒屋・株木
5	向嶋之図 平岩	うしほ平岩だと誉る飲ミ仲間・扇松
6	三田之景 出羽屋	鉄炮ハゑんりよ出羽屋で狐けん
7	今戸橋之図 玉庄	夜光の玉庄燈台の百目掛
8	本所小梅 小倉庵	下戸上戸百人も寄る小倉菴・扇松
9	両国 青柳	青柳は妙月高く花火の夜
10	柳ばし夜景 万八	万八の二階夏とハウそのやう
11	両国柳橋 大のし	大のしと貸上下の小てうちん・株木
12	両国柳橋 河半	おつな業平河内屋へ度々通ひ ヒトヒ
13	両国柳ばし 梅川	梅川へのつと日の出の江戸芸者・錦朱

「隅田川橋場渡之図 柳屋」【図9】は、前項の天保改革の調査報告でも取り上げられた店である。橋場渡し場の対岸から柳屋の外観をとらえる。報告のとおり、川から店に上がれるよう石の階段と木戸門があることがわかる。柳屋は、『武江年表』の天保11年（1840）8月に「橋場料理舗 棹月楼柳屋何某、普請成就して商売を始む」と記載があり、同時期より川口屋の隣で営業が始



図8 名所江戸百景  
木母寺内川御前栽畑  
安政4年（1857）  
館蔵83200093



図10 江戸高名会亭尽 牛嶋 武蔵屋  
天保8～11年（1837～40）  
国立国会図書館所蔵





図9 江戸高名会亭尽 隅田川橋場渡之図 柳屋 天保8～11年（1837～40）  
国立国会図書館蔵

まった。広重の本図は、開店を知らしめる広告にもなったことであろう。

「牛嶋 武蔵屋」【図10】は、向島の土手より秋葉大権現へ向かう道にあった武蔵屋の座敷と庭園を描く。武蔵屋も「隅田川向島絵図」（前掲図3）に掲載がある。池泉庭園を望む座敷で、客と芸者が拳遊びに興じ、仲居が刺身などの豪華な料理を供している。庭側から配膳していることから、調理場は別棟にあるのであろう。広々としていた料理茶屋の内部がうかがえる。

「向島 大七」【図11】の大七は、秋葉大権現と武蔵屋の間に位置した（「隅田川向島絵図」（前掲図3参照）。七重石塔や石灯籠を配した美しい池泉庭園の奥には、二階建ての母屋と平屋の別棟があった。手前には、弁慶縞の揃いの浴衣を着た男女がおり、風呂上りで涼む様子である。大七で



図11 江戸高名会亭尽 向島 大七  
天保8～11年（1837～40） 館蔵91210160



図12 江戸高名会亭尽 向嶋之図 平岩  
天保8～11年（1837～40） 館蔵91210159



は、料理のほかに浴衣付の入浴サービスが提供されていた。

「向嶋之図 平岩」【図12】は、向島の墨堤から入店できた同店の外観を描く。平岩も切絵図に掲載がある(前掲図5参照)。平岩は、「葛西太郎」の名でも知られ、『江戸名所図会』「牛御前宮 長命寺」【図13】にも「葛西太郎」として掲載がある。本図では、桜が満開の時期、花見客が同店を訪れる様子を描く。また、墨堤の花見からの酔客二人連れが店の前を通り過ぎる。

「三囲之景 出羽屋」【図14】は、本シリーズ30図の内、唯一、料理茶屋の建物が描かれていない作品である。三囲稲荷の鳥居前の掛茶屋に出羽屋の「幕の内」の幟が立てられている。出羽屋は堺町の料理茶屋で芝居の幕の内弁当で有名だった。その弁当を墨堤遊覧の客に向けて、三囲で出すようになった。本図も桜が満開の時季のようだ。出羽屋の本店を描くのではなく、あえて掛茶屋に幟という珍しい図にした。これが出羽屋の意図か、広重の作画によるものなのかは不明である。

「今戸橋之図 玉庄」【図15】は、今戸橋際の玉庄を隅田川側が捉えた図である。添えられた狂句は「夜光の玉庄燈台の百目掛」と、夜更けまで明かりが消えない玉庄の繁栄を詠んだものである。本図も夕暮れから夜への移行行く時間帯を描いたものであろう。玉庄にも舟からの出入口があったことがわかる。

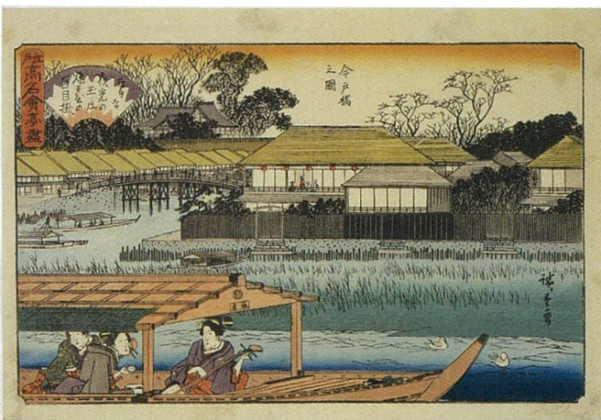


図15 江戸高名会亭尽 今戸橋之図 玉庄  
天保8～11年(1837～40) 館蔵90203051

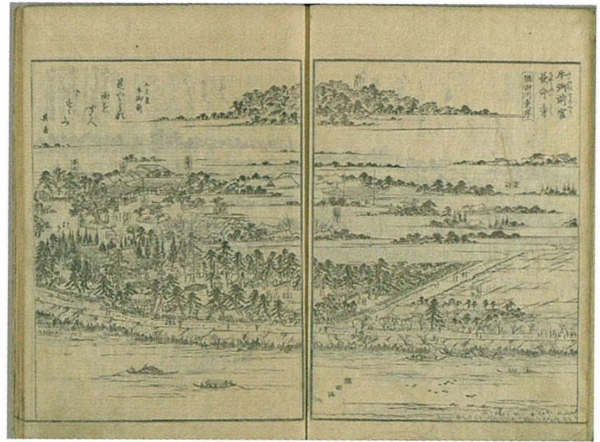


図13 『江戸名所図会』7巻「牛御前宮 長命寺」  
天保5年(1834) 館蔵91211460



図14 江戸高名会亭尽 三囲之景 出羽屋  
天保8～11年(1837～40) 館蔵09200007



図16 江戸高名会亭尽 本所小梅 小倉庵  
天保8～11年(1837～40) 館蔵09200006





図17 江戸高名会亭尽 両国 青柳 天保8～11年（1837～40） 館蔵91210147

「本所小梅 小倉庵」【図16】は、天保改革の調書にもあった料理茶屋で、源森川に面していた小倉庵を描く。10棟ほどの離れの客間を設けた贅沢なつくりであったことが本図からもうかがえる。手前の女性客らは、屋根舟で釣りに興じ、また茶を飲みながら景色を楽しむ様子である。

「両国 青柳」【図17】は、青柳から花火見物に繰り出す屋根舟に仕出し料理を提供する場面を描く。芸者らも舟に乗り込もうとしている。青柳は両国橋の東北際に位置し、本図のとおり、川から出入りでき、店の看板も川沿いにあった。格子のついた黒板塀に柳の葉が簾のように下がり、2階の座敷には青簾がかかる。風流な料理茶屋の設えがうかがえる。

「柳ばし夜景 万八」【図18】は、柳橋北詰に位置した、柳橋界限で最も大きな料理茶屋を描く。手前は柳橋を渡り、宴席に向かう芸者を描いたものであろう。「万八の二階夏とハうそのやう」と詠まれ、夏でも川風が通り涼しかったという2階の座敷は、本稿にて言及する書画会の会場として大いに利用された。

書画会の様子を描いたのが、「両国柳橋 大のし」【図19】と「両国柳橋 河半」【図20】である。大のしは、柳橋南際に位置し、広い座敷を持つ料理茶屋であった。広重は手前に隅田川、画面右奥に神田川や柳橋を配し、大のしの立地を見る者に理解させようとつとめている。2階の座敷には、書画が掛けられ大勢の人々が集う様子が見える。一方、河半（河内屋）も隅田川沿いの柳橋南側に建ち、両国橋が近かった。2階の座敷での書画会と北東側の眺望を描く。緋毛氈の上には筆を洗う大鉢や絵具の皿が並び、奥では客同士が作品を見せ合う。最奥にかかる書には、広重の他の作品にも見られ



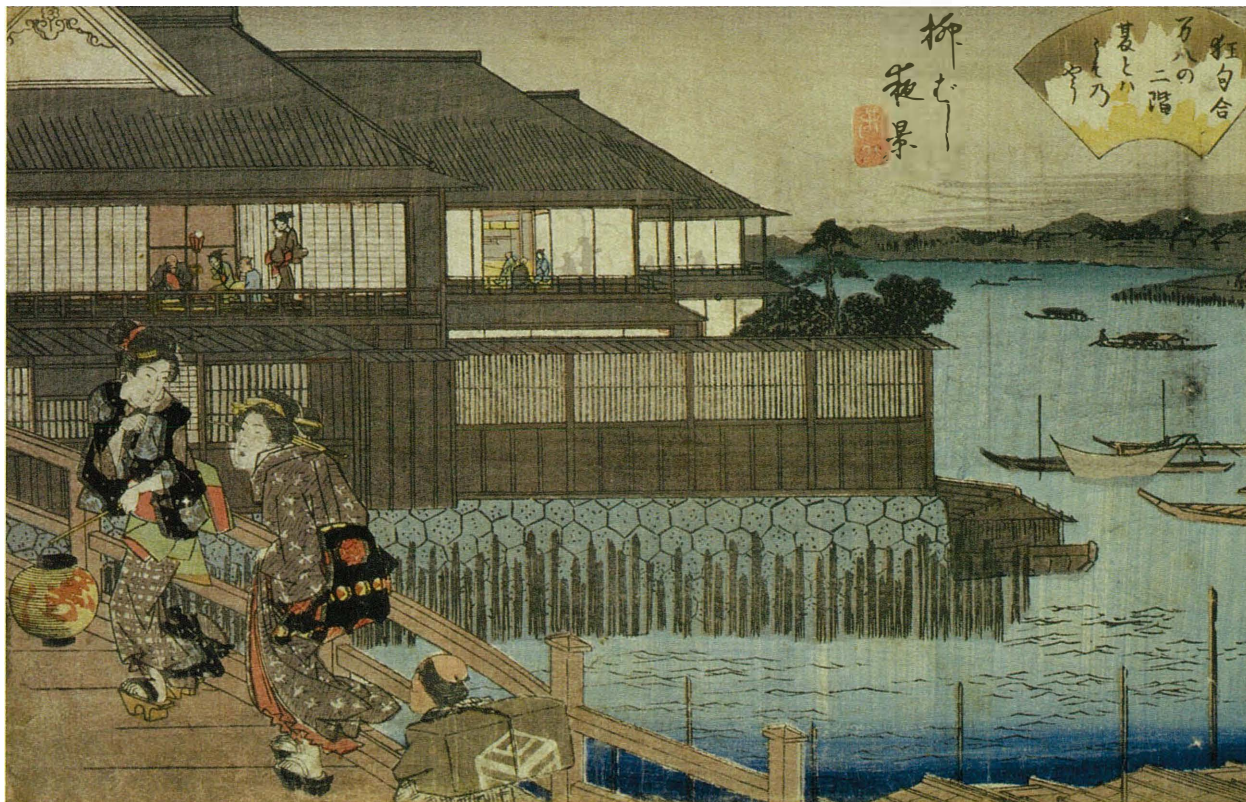


図18 江戸高名会亭尽 柳ばし夜景 万八 天保8～11年（1837～40） 国立国会図書館所蔵



図19 江戸高名会亭尽 両国柳橋 大のし 天保8～11年（1837～40） 国立国会図書館所蔵



る白粉「仙女香」の宣伝文が書かれている。

「両国柳ばし 梅川」【図21】は、柳橋南詰に建つ料理茶屋梅川の外観を描く。広重が取り上げた柳橋界隈の他店に比べると規模の小さい二階家である。小ぢんまりとしながらも風情がある設えが本図からも伝わる。柳橋から両国橋へ向かう道沿いにあったためか、通りには力士や芸者の姿が見える。

なお、柳橋・両国橋周辺の料理茶屋については、五雲亭貞秀の「東都両国ばし夏景色」【図22】や成島柳北『柳橋新誌』巻頭絵図【図23】でもその位置関係を確認することができる。このように料理茶屋の店舗名が刷物に書かれるのは、川沿いの豪華な建物に対し、人々の関心がある程度あったということではないだろうか。

以上のとおり、広重はシリーズ30図において半分近くに及ぶ13図において、隅田川の有名な料理茶屋を描き出した。名所絵を得意とした彼らしく、各店の外観や眺望をテーマとしながらも風景画・風俗画としてまとまりのある構成へと仕上げている。また、座敷での書画会を取り上げ、座敷の調度として画中画を登場させる点などは、絵師としての面目躍如たる趣向と言えよう。料理茶屋各店側から、もしくは狂句を詠んだ扇松、株木らの入銀ものの可能性も考えられているが、店を訪れたこともない鑑賞者でも、その様子を理解し楽しめるシリーズである。

図20 江戸高名会亭尽 両国柳橋 河半 天保8～11年（1837～40）国立歴史民俗博物館所蔵





図21 江戸高名会亭尽 両国柳ばし 梅川 天保8～11年（1837～40） 館蔵09200009



図22 東都両国ばし夏景色 安政6年（1859） 館蔵91210441～3



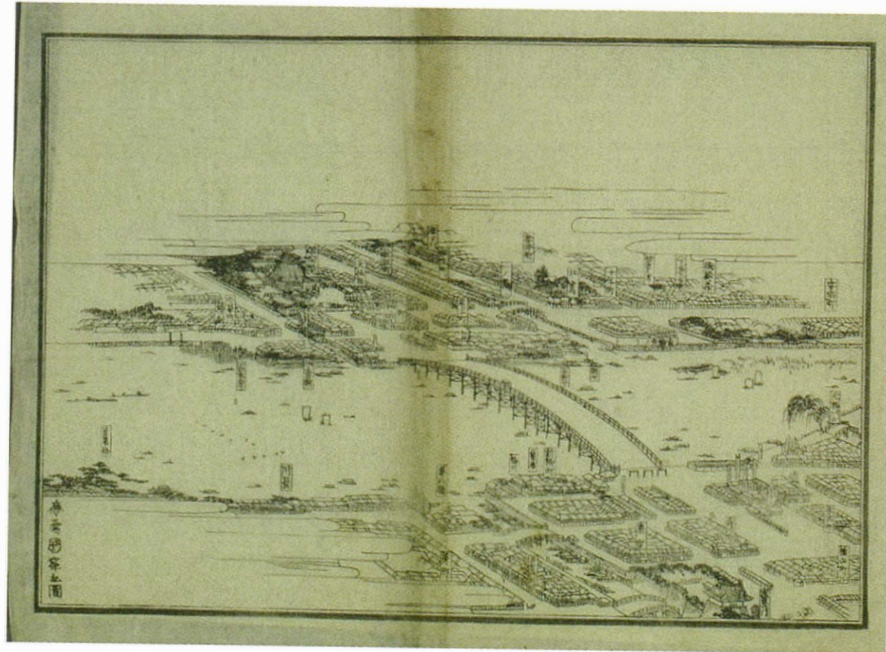


図23 『柳橋新誌』巻頭絵図 安政6年（1859） 館蔵93200391

## 2. 料理茶屋における書画会

### （1）文化活動の場となった料理茶屋

歌川広重の「江戸高名会亭尽」でもうかがえたとおり、各料理茶屋によってその客間の広さや来訪の目的は各々に異なる趣である。向島に立地する各店であれば、墨堤遊覧の一環で訪れる客が多く見え、遊覧の疲れを癒す休憩場として、または店内でも広大な庭を散策できるというような楽しみ方をされた。一方、柳橋の各店は、庭はない代わりに、川と花火というような両国橋界隈の眺望が望め、大広間の座敷があったことから、大勢の人々による会合、もしくは書画会などの文化活動に大いに利用された。

例えば、狂歌会や句会の開催も、大人数で一斉に集い、華やかに行われる場合は、料理茶屋の座

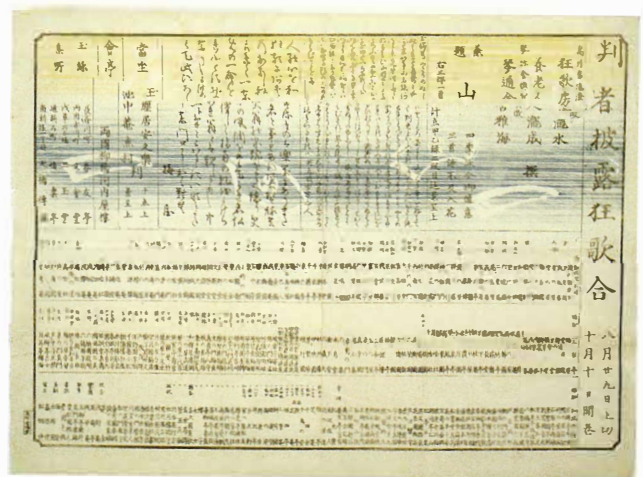


図24 判者披露狂歌合 天保頃 館蔵88200425



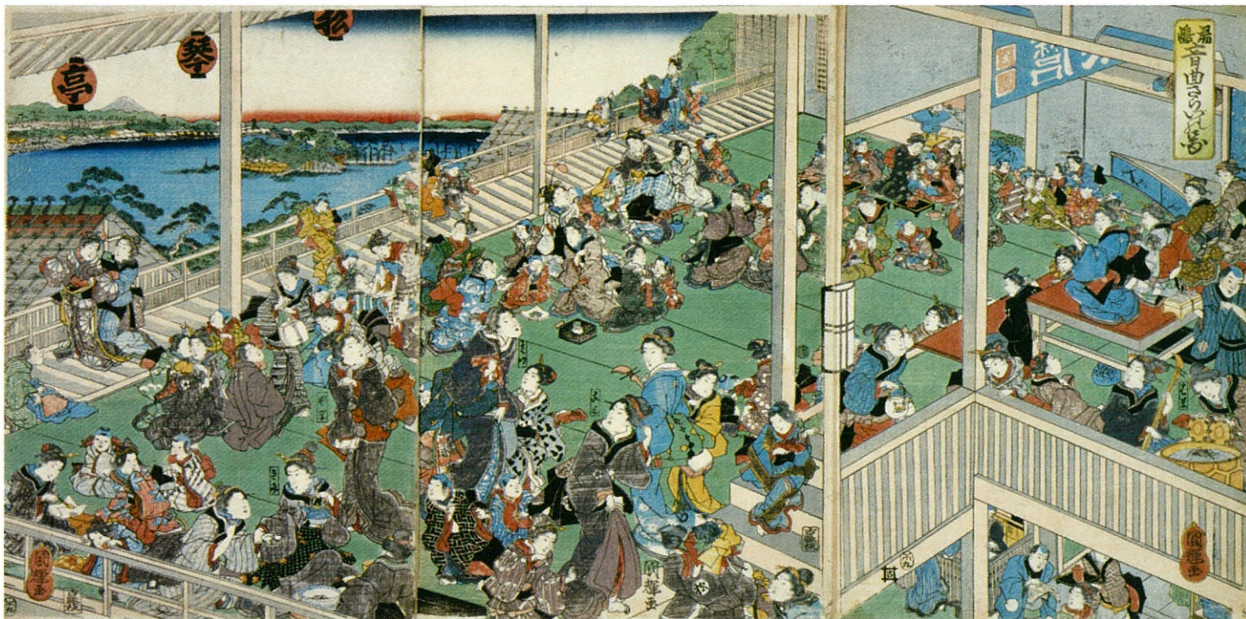


図25 湯嶋音曲さらいの図 安政5年(1858) 館蔵89200881~3

敷が利用された。当館所蔵の「判者披露狂歌合」【図24】は、天保期頃に酒月米人(狂歌房龍水)らが判者となって開催された「山」を主題にした狂歌会のピラである。10月10日に両国河内屋楼(河半)で開巻(お披露目)とあり、狂歌会の関係者に配布されたものである。

他にも、三枚続き錦絵「湯嶋音曲さらいの図」【図25】に見るように、お稽古のおさらい会が料理茶屋(本図の場合は湯島の松琴亭(松金屋))で行われることもあった。本図では、女兒の音曲の稽古の披露会が華々しく開かれ、その様子を母親や姉妹らが見守り、芸者が運営の手伝いをしている。

また、「千社札連中両国大集会の図」【図26】には、両国の料理茶屋での千社札の交換会の様子が描かれる。隅田川を望む二階の大座敷に大勢の人々が集い、それぞれの札を熱心に見せ合う熱気が伝わってくる。画面右側には、緋毛氈の上に刀の預け所があり、武士も町人も入り交じっての会合であった。

変わった催しには、大酒大食大会【図27】などもあった。文化14年(1817)3月23日に両国柳橋万八楼で開かれたもので、当日は見物人も多くいて、その有り様は、『藤岡屋日記』や馬琴の『兎園小説』にも書かれ、広く話題となった。大酒、大食いの参加者の調理は、万八楼が担当した。

このように料理茶屋は、大勢の人々が集う会合の場として、江戸時代後期

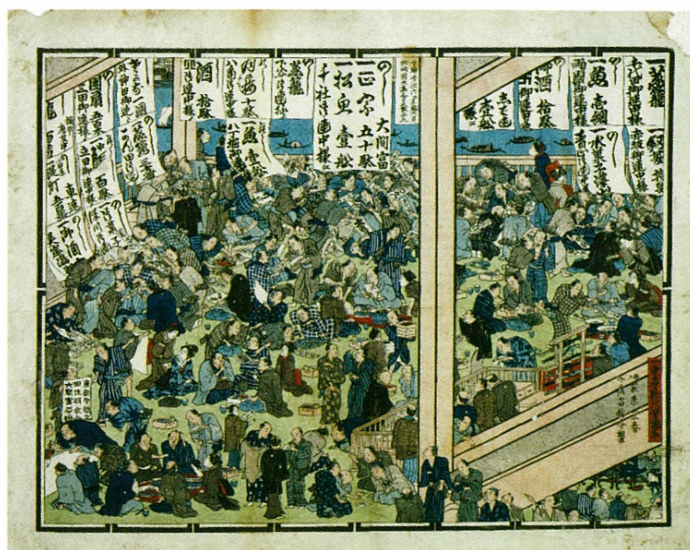


図26 千社札連中両国大集会の図  
安政6年(1859) 館蔵91221165





図27 大酒大食会絵巻 明治41年（1908） 館蔵90203529

に大いに利用されるようになった。また、そういう場が備わってきたことにより、大型の文化活動も可能となった。そして、飲食の提供、給仕や世話をを行う芸者らの同席によって、文化活動自体に享乐的な側面も強まったと言えるであろう。

## （2）書画会の分布

江戸時代後期、書画会は、「四時絶る事なく盛りに行はる」（『嬉遊笑覧』）状態で、「そこにも書画会、爰にも書画会」（『南柯乃夢』）と、江戸の至る所で行われていた。書画会のそもそもの始まりは、文人墨客が集い、即席の書画を相互に鑑賞しあうという雅な遊興であった。その趣旨からすれば、開催の場は主催者の自宅や別荘などでも事足りたであろうが、その創成期の寛政年間にはすでに大型化していた。

書画会の開催場所について、『江戸繁昌記』では、「其の地多くは柳橋街、万八・河半の二楼を以つてす」<sup>14)</sup>とあるとおり、柳橋の万八楼と河半楼（河内屋）で多く開催されたという。その全てを掌握することはなかなか難しいが、ロバート・キャンベル氏は、『焦後鶏肋冊』（国会図書館所蔵）と『雪江先生貼雑』（国立公文書館所蔵）の2種の書画会案内等の引札貼り込み帳を調査され、それぞれ天保中期から後期、嘉永から安政までの江戸における書画会の主催者や会場、日程を明らかにした<sup>15)</sup>。その成果をもとに、会場別にまとめたのが、【表3】と【表4】である。

【表3】は、儒学者の東条琴台（1795～1878）が天保14年（1843）に作成した引札貼り込み帳『焦後鶏肋冊』から、私邸や寺院を除く会場のうち件数が多い順で並べたものである。東条琴台は、天保年間より書画会を主催し、儒学者としても有名な存在であった。その人物による天保中後期の貼り交ぜ帳の書画会案内引札全94枚のうち、14枚のものが柳橋の河内屋での開催を告知するものであった。その後は、湯島天神男坂の松金屋、柳橋の万八楼、浮世小路の百川、柳橋（薬研堀）の草加屋、柳橋の柳屋と続く。東条琴台が出席、もしくは参加の案内がなされた書画会の会場は、河内屋などの柳橋の料理茶屋が中心であることがわかる。

一方、【表4】は、書家の関雪江（1827～1877）の書画会等の貼り込み帳『雪江先生貼雑』収録の



174枚の案内状から、同じく料理茶屋での開催順に並べたものである。この貼り込み帳は、関雪江所持の書画会の引札等が13冊にわたってまとめられ、嘉永から安政までの江戸の文化交流の様子を知れる貴重な資料である。その案内引札のうち、約2割にあたる36件の開催が、柳橋の河内屋であった。次には同じく柳橋の万八楼の29件と続く。この2軒の料理茶屋で、雪江の所持する書画会引札のうち4割弱の会場を占める。その後は、日本橋万町の柏木、松金屋、草加屋、柳屋へと続き、【表3】の東条琴台のものと店名も多く共通する。

【表3】と【表4】は、東条琴台と関雪江という異なる人物が所持していた引札をもとにすることから、時代別の単純な比較を行うことはできない。また、キャンベル氏も指摘されているとおり、引札の中には定例の小規模な書画会などでは料理茶屋ではなく私邸での開催が多く、また開催会場を明記していない引札も多い。ただし、当時の文化人の代表とも言える人物が参加していた大型の書画会の開催場所の傾向はうかがえよう。柳橋の料理茶屋が多く利用されたのは、第一に広い座敷を備えていたこと、隅田川沿いの景勝の優れた場所であったことが理由としてはあったであろう。

では、そのような大型の書画会開催について、次章にて曲亭馬琴の古希記念の書画会を例に実態を見ていくこととする。

【表3】天保6頃～14年 書画会の開催

【柳橋】河内屋	14 (件)
【湯島天神】松金屋	9
【柳橋】万八楼	8
【浮世小路】百川楼	7
【柳橋・薬研堀】草加屋	6
【新橋加賀町】梅松楼	5
【柳橋】大のし	3
【御蔵前】松の尾楼	2
【芝神明】車屋	2
【不忍池新土手】仙娥亭	2
【日本橋万町】柏木	1

『焦後鶏肋冊』収録 94 枚案内状

【表4】嘉永～安政 書画会の開催

【柳橋】河内屋	36 (件)
【柳橋】万八楼	29
【日本橋万町】柏木	12
【湯島天神】松金屋	9
【柳橋・薬研堀】草加屋	6
【柳橋】柳屋	4
【新橋加賀町】梅松楼	2
【上野広小路】松源楼	2
【浮世小路】百川楼	1

『雪江先生貼雑』収録 174 枚案内状

### 3. 天保七年八月十四日の馬琴の書画会

#### （1）書画会の経緯と準備

『南総里見八犬伝』などで知られる曲亭馬琴（1767～1848）は、自ら古稀祝賀の書画会を天保7年（1836）8月14日に柳橋万八楼にて開催した<sup>16)</sup>。馬琴はこの書画会の経緯について、複数の友人・知人宛の書簡の中で詳しく述べており、大書画会の内実が如実にうかがい知れる。

そもそも馬琴が書画会を開催することになったのは、『南総里見八犬伝』の版元である丁子屋平兵衛と和泉屋市兵衛の勧めがあったからであった。同年6月22日付の殿村篠斎宛の書簡にその経緯が語られている。殿村篠斎（1779～1847）は、伊勢松坂の木綿問屋商人で、本居宣長の門人でもあり、馬琴の文筆活動の良き理解者でもあった。

拙算賀会之事、金主ハ丁子や・泉市兩人ニて、副世話人薫斎・平林庄五郎、[『弓はり月』板元の迹] 右四人ニて、しきりニ世話いたしくれ候間、万事うち任せ置候。

（中略）畢竟、書画会等ハ、風流に似て、実ハ利の為ニ候ヘバ、うらはづかしく本意ニあらず候へども、近年拙家種々の物入打つゞき、頗傾急ニ及び候を、丁子や等察し候ての親切ニ候ヘバ、いなむによしなく、右之勢ひニ成候。本日ハ七月廿九日、両国柳橋万八楼ニて興行と定被致候。盆後廿八日迄ハ、万八楼先約有之よしニ付、無是非廿九日ニいたし候。彼樓の繁昌、且会の多キ事意外ニて、おどろかれ候。

（天保7年（1836）6月22日 殿村篠斎宛書簡）<sup>17)</sup>

この書簡では、古稀の祝いの書画会が、丁子屋と和泉屋、副世話人の書家の松本薫斎（？～1870）、『椿説弓張月』の版元平林庄五郎の世話で進んでいること、場所は柳橋の万八楼で、万八楼は盆後（7月16日）から28日までは予約でいっぱい、29日に開催することになったことが書かれる。さらに馬琴自身は「書画会杯ハ、風流に似て、実ハ利の為ニ候ヘバ、うらはづかしく本意ニあらず候」と、書画会の実態は風流には程遠く実利のためのものなので、大変恥ずかしく本意ではないことも記している。馬琴の家では、その前年の天保6年5月に嫡男の宗伯が38歳で病没してしまい、馬琴は8歳の孫の太郎と滝沢家の将来を案じていた。そこで太郎のために、鉄砲組の御家人株を取得することとし、その資金を調達しなければならず、資金集めの書画会開催という世話人らの勧めに応じたのであった。

このように料理茶屋の予約を終えると、次に出席者に向けた引出物の準備を始めた。「上中下三種ニいたし、上ハ画賛のふくさ二百枚、中ハ箱入長寿碗盃七百、下ハ画賛の扇子五百本、此節をさをさしこみ候。」と、三段階に分けた準備が進んでいた。ところが、その引出物が間に合わないという事態が発生してしまう。

一峨子北堂遠行ニて、服紗之画、出来かね候よし、丁子やより及承候。日限追々逼り候故、心不安候。

何分よろしく御取斗ひ被下候様、所希御座候。

(天保7年(1836)7月24日 松本薫斎宛書簡)<sup>18)</sup>

当館所蔵の、書画会副世話人である書家の松本薫斎宛の書簡【図28】では、袱紗の絵を頼んだ絵師の一峨が遠くに出かけ、注文の袱紗の絵ができない旨を丁子屋から聞き、書画会開催の日にちが迫ってきて、不安である旨を記している<sup>19)</sup>。この依頼を受けた絵師の一峨とは、後の鳥取藩江戸詰めお抱え絵師の沖一峨(1796~1861)のことで、当時は薬研堀に居住の町絵師であった<sup>20)</sup>。この文面を薫斎に差し向けたことから、薫斎と一峨が懇意の間柄であったことがうかがえる。馬琴は別の書簡でも「ふくさの画ハ、抱一門人ニて、両国薬研堀に住居いたし罷在候。当今被行候よし。薫斎懇意ニ付、丁子やよりあつらへ候て、画せ候也」<sup>21)</sup>とも記述している。

結局、この袱紗絵のこともあり、7月29日の開催は準備が整わず延期となった。

拙齡古稀賀会之義、七月廿九日とシ候へども、盆前後ハ、世話人多務ニて行届かね、且配り物書画等も間ニ合不申候故、八月中旬ニ致し可然旨、泉市・丁子屋等申ニ付、任其意、則八月十四日ト相定申候。当今ハ摺物を略し、配り物に心をを用ひ候方、流行のよしニて、世話人等取斗ひ、三種にいたし、上 画賛ふくさ一幅づゝ 中 画賛扇二本づゝ 下 長寿盃箱入猪口也

(天保7年(1836)8月6日 殿村篠斎宛書簡)<sup>22)</sup>

7月15日の盆前後は世話人らも忙しく、また配り物の書画等も間に合わず、和泉屋や丁子屋からも相談があり、結局8月14日に延期となった。書画会開催の引札は省略し、引出物の準備を続け、上が画賛入りのふくさ1幅ずつ、中が画賛入りの扇2本ずつ、下が箱入の猪口とした。

書簡の中でも話題となった配り物の沖一峨画の袱紗と考えられる資料が、現在、早稲田大学図書館に収蔵されている。「馬琴古稀自祝歌并一峨畫龜」【図29】は袱紗が軸装になされ、沖一峨による「亀図」に馬琴の自祝歌「ななそちのとしなみよせつ八十嶋も なほこゆるきのいそかれぬ身に」が賛として添えられている<sup>23)</sup>。この袱紗は200枚が準備され、その賛は全て馬琴が自ら筆で書いたもので、大いに日にちを要したという。

このようにして準備が整い、いよいよ8月14日の書画会当日を迎えることとなった。

## (2) 書画会の当日

馬琴の古稀の書画会前日にあたる8月13日は、夜中の12時の時点で大荒れの天候であった。そのため翌14日もこの天候であろうという世話人たちの話し合いの結果、300人前の食事しか用意しなかった。ところが当日は雲ひとつない快晴の天候であった。

膳ハわづかに三百人前あつらへ候処、出席の賀客七百余、世話人その外を加へ候てハ、八九百

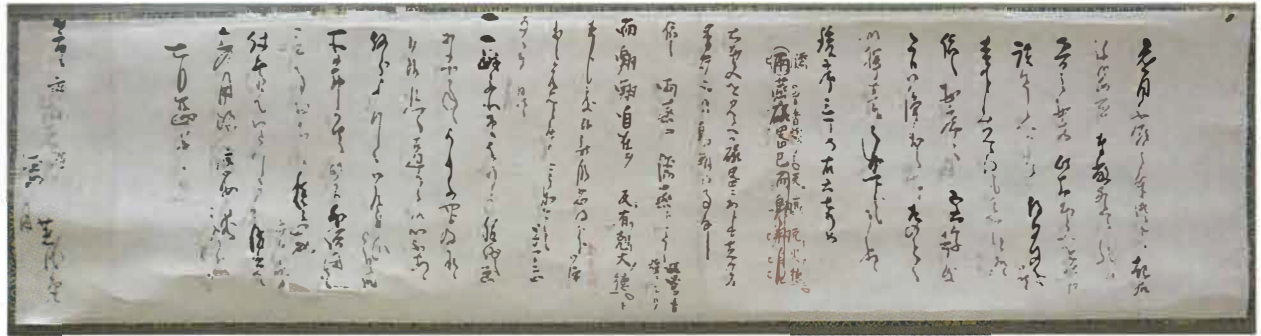


図28 松本薫斎宛書簡（滝沢馬琴消息） 天保7年（1836） 館蔵82977102

図29 馬琴古稀自祝歌并一峨畫龜 天保7年（1836） 早稲田大学図書館蔵

人集会いたし候故、万八にてハ庖厨大さわざいたし、亭主ハ飯をたき、女房・媳婦、膳碗の洗かた等いたし、家内一同食餌のいとまもなく、終日立はたらき候よし。万八主人、始て飯たきをいたし候とて笑ひ候よし、後に聞え候。されども、馴たる事とて、あつらへ候ハ三百人前候処、八九百人前の膳碗を、よくも間ニ合せ候もの哉とて、人々感じ候事ニ御座候。

(天保7年(1836)10月26日 殿村篠斎宛書簡)<sup>24)</sup>

天氣が功を奏したためか、当日の出席者は700人以上、世話人や芸者なども入れて800人から900人の出席者が集まった。このため前夜の天候を見て判断した三百人前の御膳では全く対応ができなかった。そのため万八楼の厨房は大騒ぎとなり、主人自らが飯を炊き、女房と嫁は御膳や碗の洗いを担当した。万八楼の人々は食事の暇もなく、終日立ちっ放しで働いたという。万八の主人は、初めて飯炊きを担当したと笑っていたという。それでも万八楼が、出席者の食事を間に合わせたことに、馬琴を含め皆が感心したのだった。さらに、馬琴は万八楼の中の様子について、書中で説明をしている。

御存もあるべく候、万八楼ハ柳橋第一の大楼にて、中座敷四十畳、前後三十畳、并二十畳も二間有之、通計百十畳あまりの座敷へ来客居あまり、後にハ縁頬へ立出て、膝を合せてをるもあり、下座敷へも大勢罷在候故、立錫の席も無之候ひき。二十年来、如此盛会ハなしと、万八楼主人申候よしニ御座候。

(天保7年10月26日 殿村篠斎宛書簡)<sup>25)</sup>

万八楼は柳橋一帯では第一の大楼で、座敷は中座敷が40畳でその前後に各30畳、他に10畳が2間あり、合せて120畳ほどの座敷を備えていた。しかし馬琴の書画会の来客は800、900人で、すし詰め状態であった。万八楼の主人が言うには、二十年来、これほどの大会合はなかったという。

此内十畳斗ハ、席書・席画をなす人の席とす。求るもの、蟻の甘キに附くが如し。老拙は只、客の挨拶をなすのミにて、当日たのまれたる絹地・唐紙・扇面ハ札を附させ、そのまゝ持かへりて、八月下旬迄ニ書て遣したり。

(天保8年4月20日 鈴木真紀広宛書簡)<sup>26)</sup>

万八楼2階の120畳ほどの座敷のうち、10畳ほどのスペースを席書、席画を行うスペースとした。書画を求めるものは、その場に群れ集った。馬琴はその日はただ、客に対し挨拶を行うだけで、客らから書くよう頼まれた絹本や紙本、扇面は持ち帰って8月下旬まで残していた。その中の一つとも考えられるのが、早稲田大学図書館所蔵の長谷川雪旦画の「滝沢馬琴肖像並古稀自祝之題詠」<sup>27)</sup>【図30】である。『江戸名所図会』の挿絵などで知られる長谷川雪旦(1778～1843)も、この書画会に出席し、本図では馬琴の古稀の賀会での姿を描いた。絵に添えられた賛「つきせしな齢はさゝれいし亀のよろつよもきの嶋をおふまで」は、馬琴自らによる。





図30 滝沢馬琴肖像並古稀自祝之題詠 天保7年（1836） 早稲田大学図書館蔵

【表5】馬琴の書画会 主な出席者

儒 者	東条琴台	大郷信斎		
詩 人	菊池五山（名代）	大久保天民（名代）		
書 家	松本董斎	関根江山	関琴山	
絵 師	長谷川雪旦	蹄斎北馬	鈴木有年（名代）	沖一蛾
	喜多武清	谷文晁（名代）	谷文一	春木南溟
	鈴木南嶺	渡辺華山		
浮世絵師	歌川国貞、貞秀など弟子八九人		歌川国直	歌川国芳
	溪斎英泉	歌川広重	魚屋北溪	柳川重信
狂歌師	芍薬亭長根	梅の家かきつ	山川白酒	梅丸
戯作者	柳亭種彦	烏亭焉馬	墨川亭雪麻呂	墨川亭梅麻呂
	東里山人	為永春水	滝亭鯉丈	
落語家	林屋正蔵			
歴々家 （紳摺家）	石川畳翠（名代）	屋代弘賢	山本宗洪（官医）	山本宗瑛（官医）
板木師	朝倉伊八	桜木藤吉	植田守	
その他	・江戸中の書林 残らず出席。 ・江戸地本問屋 残らず出席。 ・貸本屋 惣名代で一人ずつ出席。 ・紙問屋 十人ばかり出席。 ・雁の間・帝鑑の間・菊の間留守居 惣名代で一人ずつ出席。 ・薩州家老伊貝氏			

【表6】馬琴の書画会 収支

収 入	当日の祝儀等	110両余り
	後日の祝儀等(留守居、地方の知人から)	14、5両
支 出	引出物費用、万八楼への支払、 世話人への進物代（反物、鯉節）	76両ほど
収 支		50両余り

馬琴は本書画会について複数の友人に対し、その成功した状況を事細かに書面にて伝えた。出席者についても、著名な人物について名前を列記して知らせた。【表5】は、手紙の中で書かれた主な出席者である<sup>28)</sup>。

天保7年（1836）頃、馬琴は『南総里見八犬伝』などの代表作で知られる人気戯作者であると同時に、著名な文化人でもあった。馬琴の書画会は、大々的な引札で事前に案内を出すことはされなかったが、高名な知人には馬琴自ら出向き開催を知らせたほか、丁子屋と和泉屋ら世話人らがあちこちに出向き参加を呼びかけた結果、上記のような錚々たる参加者が集まった。江戸城からも出席があったことや本屋関係は残らず出席したことからも、身分や職業を越えてさまざまな人々が集ったことを表している。こういった会合を仕切れたという点は、世話人らの尽力も大きかったであろうが、料理茶屋の万八楼のもてなしも大きかったと思われる。

馬琴は、この書画会の収支についても手紙で報告をしていた。それをまとめたのが【表6】である。書画会の収入は、当日と後日の祝儀を合わせて125両程度、支出は76両ほどになった。支出では、袱紗や扇子などの引出物の費用や、万八楼への支払いが多くを占めた。馬琴の手元には50両余りが残り、これは世話人らによれば「先生なればこそ、かばかりになりぬ」<sup>29)</sup>ということであったが、馬琴自身は支出が思いのほか多かったことを振り返っている。この結果だけを見ても、書画会が文化活動として名を広めるだけでなく、経済的な活動としても非常に有効であった側面がうかがえる。

残念ながら、馬琴は当初の目的とした御家人株の取得をこの収入だけではまかなえず、蔵書を売り、神田の家宅を売り、ようやく合せて130両を調達し、株の取得が可能となった。

馬琴の書画会については先行研究などでも取り上げられてきたが、本章では料理茶屋の万八楼での開催に関すること、また館蔵品の馬琴の書簡を取り上げた。次に、書画会の世話人として、料理茶屋とは別の仕切りを行っていた扇面亭平四郎という重要な人物を取り上げ、隅田川の料理茶屋での書画会の興隆の背景の地域性を押さえることとする。

## 4. 書画会の世話人・扇面亭平四郎

### （1）扇面亭の役割

書画会に関する当時の記録を追っていくと、扇面亭についての言及がしばしば見られる。書画会のさまざまについて、料理茶屋だけでなく扇面亭こと日本橋馬喰町の扇屋伝四郎が面倒を見ていた<sup>30)</sup>。

馬喰町扇面亭といふ者あり、諸家発会又書画会に出て、扇面を售り、其会の事に狎れて、五山と同じく、会を催さむとする者は、先此者共に頼みて催す事也（『きゝのまにまに』）<sup>31)</sup>

馬喰町の扇面亭は、諸家の会合や書画会に出て、扇を売り、それらの会のことに精通し、漢詩の菊池五山と同じく、こういった会を催そうとする者は、まずこの者らに依頼して催していたという。

このことは、『江戸繁昌記』の書画会の項にも同様のことが書かれる。

扇面亭某父子、風流相ひ受け、並びに会儀に閑ひ、其の格式に達す。故を以って集会を諮る者、皆先ず就いて質す（『江戸繁昌記』）<sup>32)</sup>

扇面亭の父子は、書画会に通じ、会を計画する者は誰もが皆、まず相談する、と。

実は、前章で取り上げた天保7年（1836）の馬琴の書画会でも扇面亭は控え、席書・席画に必要な扇や唐紙を売っていた。会場では5両余りの売上げがあったという。

席上ニて扇子ト唐紙ヲ売に、扇面亭五両余の商ひをせしと云。（天保8年（1837）4月20日鈴木牧之宛書簡）<sup>33)</sup>

より詳しく扇面亭の世話の様子を記載した事例が、式亭三馬の書画会である。三馬の書画会は、馬琴よりさかのぼること25年前の文化8年（1811）3月、東両国の料理茶屋中村屋で開催された。中村屋も明治に至るまで、書画会等の文化活動の会場としてしばしば利用された大型の料理茶屋である。三馬の書画会では、前日からの世話人を浮世絵師の歌川豊国、国満、国貞や山東京伝、版元の西村源六、鶴屋金助らが務め、当日の世話は扇面亭に一任された。

扇面亭は、馬喰町肴店に住す扇屋伝四郎が事也、会席にて、扇子、唐紙、短冊等を商ふ人（中略）

毛氈、硯の類は、扇面亭より損料にて貸す事也、至極便利にてよし、草履番人、酒番人とも、扇面亭より雇ひ人、甚だ事馴たる者どもなり（『式亭雑記』）<sup>34)</sup>

これによれば、扇面亭は、書画会会場にて、扇子や唐紙、短冊などを出席者に販売し利益を得ると同時に、席書・席画に必要な毛氈、硯などの諸道具の貸出を行っていて、何かと忙しい主催者には非常に便利な存在であった。また、草履の番人、酒の番人も扇面亭を通した雇い人で、書画会の運営に大層馴れている者であったという。この者たちは、会場である中村屋のさまざまなことにも精通していたのではないだろうか。扇面亭は、書画会において、料理茶屋が担う料理と飲食、接客業務を除く、主に書画関係の雑務を行い、主催者を補助していた。

歌川広重（2代）による三枚続きの錦絵「風流書画会之図」では、扇面亭主人・扇屋伝四郎の姿も描かれている【図31（図1拡大）】。狂斎（河鍋暁斎）の隣で煙管を手にし、参加者に交じっている。このような同席によって、会のこと、高名な文化人らのこと、書



図31 扇面亭伝四郎（「風流書画会之図」部分）  
文久（1861～4）頃  
館蔵93201641～3

画のこと、さまざまについて詳しくなり、やがて書画会では「先ず就いて質す」存在として欠かすことができなくなったのではないだろうか。

## （2）扇面亭の立地

書画会の世話をあれこれ行っていたという、扇面亭の店舗は、扇面亭の主人である扇屋伝四郎編の『江戸当時書家人名録』（文化12年版）の奥付<sup>35)</sup>や『江戸名物詩』（天保7年）の記述<sup>36)</sup>によれば、横山町肴店に位置していた。横山町は、常盤橋から浅草御門へ向かう本町通両側の町屋で、小間物・薬種・書物など各種問屋が軒を並べる一帯であった。横山町肴店は、横山二丁目・三丁目の境に位置する馬喰町に向かう横道で、その道に面して扇面亭はあった。同店から柳橋・両国地域の料理茶屋は程近く、さまざまな用件を務めるにも非常に好都合であった。

扇面亭ばかりでなく、この周辺に住まう文化人は多かった。馬琴の書画会で活躍した沖一蛾も薬研堀に自宅があった。神宮文庫所蔵の「詩暦兼題発会附」内の「一蛾探三寓居郷導略図」<sup>37)</sup>は、薬研堀の沖一蛾宅を案内するために天保後期に制作された地図であるが、横山町肴店の扇面亭も掲載されている。

また、扇屋伝四郎が文化12年（1815）に編集刊行したものがはじまりである『広益諸家人名録』には、薬研堀や米沢町、横山町、村松町に住居を構える文人らが少なくないことに気付かされる。柳橋や両国の料理茶屋の近隣に文人らも多く住していたことは、料理茶屋を舞台にした文化サロンを形成することにおいてもこの場が打ってつけであったと言えよう。

隅田川流域での書画会の開催には、広い座敷を備え、水辺の風光明媚な景色が広がり、舟でも訪れられる交通にも便利な場所に関係者にとっても立ち寄りやすい場であったことが大きかった。そして料理茶屋の周囲には、扇面亭や文化人らの住居もあった。こうした事由からも、この地域の料理茶屋で文化活動が江戸後期に興隆したのであった。

## おわりに 明治以降の隅田川流域の料理茶屋 ～ 書画会活動の消滅

江戸時代後期に流行した書画会は、明治前期までその開催が続けられた。浮世絵師の河鍋晩斎らによる書画会の熱気については、晩斎自身による克明な記録から伝えられる<sup>38)</sup>。しかし、晩斎は明治22年（1889）に亡くなり、一方でそのような集まりも明治20年代には徐々に下火となっていき、書画会の持つ展覧という側面而言えば、博覧会などの別の「場」が新たに設けられていった。

隅田川流域の料理茶屋自体にも陰りが垣間見える。明治23年（1890）刊行の『東京買物独案内』<sup>39)</sup>には、東京府内41軒の料理茶屋が掲載されているが、隅田川沿いはわずかに9軒を数えるのみである。文政7年（1824）の『江戸買物独案内』には、63軒のうち隅田川流域は18軒の掲載があったのに対して半減であった。その9軒の内訳は、向島の植半、鶴岡、柳橋の亀清楼、川長、柳光亭、東両国の中村楼、青柳楼、薬研堀の大又、浜町の常盤屋である。新興の料理屋の名前も見られ、江戸以来の店は、

植半や川長などわずかに数軒という状況であった。

明治期に残った店舗の中でも、料理茶屋の広い座敷が展覧の場へと転用される事例もあった。東両国の柏屋は、明治17年（1884）に両国井生村楼となり、書画骨董の展示、売立会場となった。また、江戸後期から明治にかけて書画会の主要会場の一つであった東両国の中村楼は、明治33年（1900）に伊勢平楼へと名前を変え、明治40年（1907）に美術品の取引を行う東京美術倶楽部に土地・建物が売却された<sup>40)</sup>。しかし、すでに日露戦争後の隅田川流域は工業地帯として発展しており、文化交流の場は、京橋、銀座の画廊や倶楽部、または博覧会、博物館などへと移っていったのである。

そして、明治期以降の学術文化の変化の様相も影響している。芸術分野にも西洋の思想が導入され、絵画は絵画、書は書というように、各分野でそれぞれ近代化が図られ、個々の芸術性の達成が強く追い求められるようになった。そのため、異分野との交流や会合は、制作活動においてそれほど重視されなくなっていった。増してや、歓談を行い、飲食や景色を楽しみ、即席の書画に親しむ書画会のような交遊は否定される向きとなり、書画会を成立・発展させた大きな要因の経済的活動についても、文化・芸術の文脈の中で語られることは避けられるようになった。こうして、本稿で取り上げた隅田川流域を中心とした書画会等の文化活動は、料理茶屋という会場側の変化、及び主催者である文化人側の変化、文化芸術活動そのものの変化に伴い、活動自体が失われていった。

従来、展示や研究において、両国地域の文化イベントといえば、花火、盛り場での見世物や芝居、寄席、あるいは回向院での相撲や開帳などが中心に扱われる。また、隅田川流域においては、花見や舟遊び、雪見などの行動文化について関心が向けられてきた。しかし一方で、江戸の文化ネットワークを生み出していた書画会等の交遊の場としての一帯の地域性にも注目がより集められてもよいであろうし、料理茶屋が果たした役割にも目を向けられてもよいであろう。また、江戸文化史を検討する上で、料理茶屋あるいは私邸などにおける身分や分野を超えた関係が、共同制作、共同刊行あるいは作品の総合性を生み出したという点について、より一層の積極的な評価がなされるべきであろう。

#### 【註】

- 1) 書画会に関する先行研究には、揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』（吉川弘文館、2009年）、ロバート・キャンベル「天保期前後の書画会」『近世文芸』47号（1987年11月、pp.47-72）、大久保純一「書画会に関する資料群」『歴博』190号（2015年5月、pp.20-23）、小林忠「江戸時代の書画会」『現代のエスプリ』別冊『江戸とは何か 1 徳川の平和』（1985年10月、pp.166-177）がある。
- 2) 本図には、仮名垣魯文、恵斎芳幾（落合芳幾）、狂斎（河鍋晩斎）、花所隣春（福島隣春）、松本春娥が出席者として描かれ、文久3年（1863）の『文久文雅人名録』と一致する。よって制作年代を文久頃と推定し、作者は画風・落款からも2代広重と考える。本図には、30名を越える文人が描かれるが、人名録等にも掲載されておらず詳細が明らかでない者も多く、いかなる意図を持って本図が制作されたものか課題が残る。
- 3) 『増訂 武江年表 2』（東洋文庫118）平凡社、1968年、p.19
- 4) 『大田南畝全集 第19巻』岩波書店、1989年、p.710
- 5) 『新燕石十種 第6巻』中央公論社、1981年、p.124

- 6) 『日本随筆大成 第2期 第20巻』 吉川弘文館、1974年、p.368
- 7) 『日本随筆大成 別巻8 嬉遊笑覧 2』 吉川弘文館、1979年、pp.188-189
- 8) 『守貞謾稿 第1巻』 東京堂出版、1992年、p.137
- 9) 『江戸名物評判記集成』 岩波書店、1987年、pp.203-204
- 10) (前掲8)p.139
- 11) 『大日本近世史料 市中取締類集十五』 東京大学史料編纂所、1982年、pp.115-240
- 12) (前掲11)pp.176-8
- 13) 『江戸の料理屋－広重の「江戸高名会亭尽」』 平木浮世絵美術館、1999年
- 14) 『江戸繁昌記 1』 (東洋文庫259) 平凡社、1974年、p.96
- 15) ロバート・キャンベル「天保期前後の書画会」『近世文芸』47号 1987年11月 pp.47-72
- 16) 馬琴の書画会の模様については、揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』(吉川弘文館、2009年)、中村幸彦「馬琴の書画会」(『中村幸彦著述集 第12巻 国学者紀鐸』中央公論社、1983年、pp.279-287)
- 17) 『馬琴書翰集成 第4巻 天保6年-天保8年』 八木書店、2003年、pp. 187-188
- 18) (前掲17)p.191
- 19) 当館所蔵の曲亭馬琴から松本薫斎宛の書簡は、二つの事項を伝達している。前半は、馬琴が序文を寄せ、薫斎が清書を行った墨川亭雪麿著『濡燕栖傘雨談』後編(天保7年刊)について、訂正の願いを申し出る内容である。後半は、本稿の馬琴書画会に関する内容で、引用の通りである。本資料は、現状は紙に張られ軸装となっている。旧中村素堂コレクション。
- 20) 本稿で取り上げる馬琴の書画会について、山下真由美「沖一峨における画風の多様性について－人的交流との関連から－」(『美術史』第164冊、2008年3月、pp.398-416) では、絵師沖一峨との関わりを中心に扱っている。
- 21) (前掲17)p.195、天保7年8月4日 小津桂窓宛書簡
- 22) (前掲17)p.196
- 23) 資料寸法36.2×41.3cm (軸装外寸137.4×55.2cm)、絹本墨画
- 24) (前掲17)p.222
- 25) (前掲17)p.222
- 26) (前掲17)p.297
- 27) 本紙寸法84.5×29.0cm (軸装外寸158.0×41.7cm)、絹本著色
- 28) (前掲17)pp.223-4、天保7年10月26日 殿村篠斎宛書簡 及び (前掲16)p.297、天保8年4月20日 鈴木牧之宛書簡
- 29) (前掲17)p.299、天保8年4月20日 鈴木牧之宛書簡
- 30) 扇面亭の活動及び書画会にとどまらない文化活動への関与については、莊司賢太郎「扇面亭伝四郎(一)～(四)」『江戸落穂拾 せんすのある話Ⅱ』(創英社、2006年、pp.32-67) に詳しい。
- 31) 「きゝのまにまに」『未刊随筆百種 第6巻』 中央公論社、1977年、p.141
- 32) (前掲14)p.108
- 33) (前掲17)p.297
- 34) 「式亭雑記」『続燕石十種 第1巻』 中央公論社、1980年、pp.67-68
- 35) 『近世人名録集成 第2巻』 勉誠社、1986年、p.15



- 36)『江戸名物詩 初編』(木下梅庵著、天保7年、嵩書房)十丁裏に「扇面亭 書画扇 両国横山町肴店 文晁武清米庵ノ筆五山詩仏縁陰ノ詩年年ノ仕込新タニ書画扇面売り初ム発会時」と記載がある。(国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8929318> (2016年8月アクセス))
- 37)『沖一蛾 ―鳥取藩御用絵師―』鳥取県立博物館、2006年、p.154に掲載。同地図資料は、沖一蛾という絵師の藩御用絵師のみにとどまらない広範な活動実態を示すばかりでなく、扇面亭を含めた、両国、薬研堀、横山町に至る一帯の商店 ならびに文人関係の居宅の場所を記す点において極めて資料価値が高いと言える。商店には、扇面亭のほか、両国米沢町の五色唐辛子、七色唐辛子、両国餅など、両国吉川町の薬種問屋虎屋、薬研堀の井筒屋茶店、横山町の玉屋眼鏡店、塗物問屋会津屋、せきれい台で有名な日野屋小間物店の掲載がある。その他、蕎麦屋や寿司屋などの記載もあり、一帯の状況がつぶさにくかがえる。
- 38)『酔うて候 河鍋曉斎と幕末明治の書画会』(思文閣出版、2008年)
- 39)『東京買物独案内』上原東一郎、1890年
- 40)『美術商の百年 東京美術倶楽部百年史』東京美術倶楽部・東京美術商協同組合、2006年、pp.94-96に詳しい。